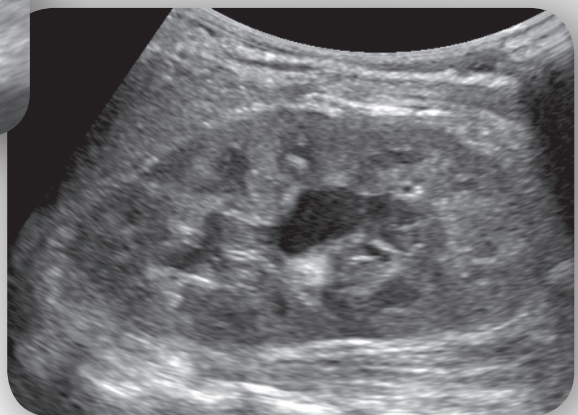
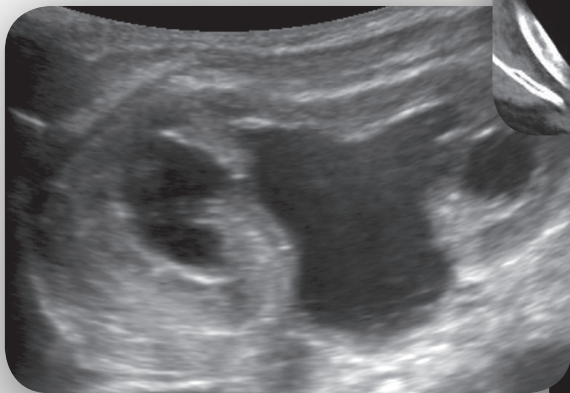
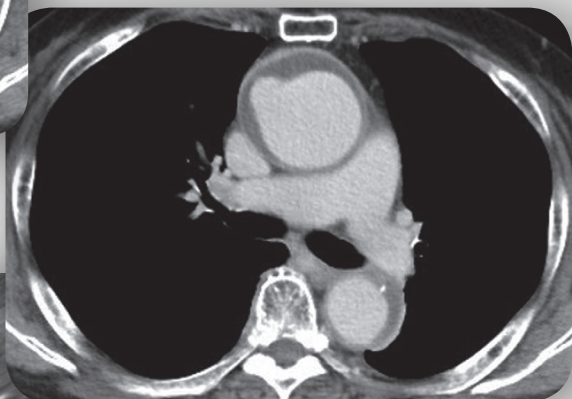
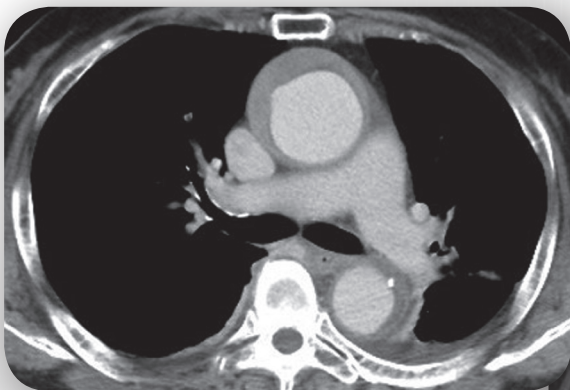


特集 領域別 経過観察



(写真：p.626, 668より)

画像の要点

序説

画像診断の日常では、新たな患者の画像よりも、経過観察目的の画像をみることのほうがはるかに多い。各臓器、各領域で、侵襲的な検査や治療を行わず単に経過を追っている患者もいれば、病態ごとにさまざまな治療が行われた患者もその対象となる。われわれ画像診断医は読影に際し、担当医が何を求めているのかをその都度的確に把握し対応することが求められる。例を挙げると、偶発的所見、あるいは直ちに治療を必要としない所見に遭遇した場合に経過観察を行う際の注意点、悪性腫瘍に対する薬物療法や放射線治療などの治療後にみられる変化や合併症の特徴、さらには再発や新たに治療が必要になる病態を的確にとらえるためのポイントなど、当然のことながら非常に多くの情報を駆使しながら日常診療に携わっていることになる。

今回の特集では、このような経過観察画像で特に注意を払うべき点や、見逃してはならない変化などを、領域別に臨床の第一線でご活躍されている先生方に解説いただいた。

脳腫瘍の治療後や未破裂脳動脈瘤などについて菅井康大先生らに、頭頸部癌に対する治療後について馬場 亮先生らに、肺結節のマネジメントや肺癌の治療後について遠藤正浩先生らに、大動脈瘤や大動脈解離について沈 金花先生らに執筆いただいた。また、肝細胞癌の治療後や膵IPMNについて中尾 聖先生らに、泌尿器領域の腫瘍について井戸 愛先生らに、婦人科領域の腫瘍について園山康之先生らに、小児の先天性水腎症と骨軟骨腫について宮坂実木子先生に解説いただいた。

今回の監修において、執筆者の先生方にはこちらから具体的な疾患や病態を指定せずに、各領域で重要と考えられる事項をお考えいただいたが、非常に多岐にわたる内容にもかかわらず、ポイントを絞りコンパクトかつ充実した内容の論文としてまとめたいただいた。ご多忙のなか、快くご執筆いただいた先生方に、この場を借りて深謝する次第である。本特集が日常診療で役立つ実践的な手引きとなれば幸いである。

横山健一